

## 第20回ウイルス学キャンプ in 湯河原 開催のご案内

主催：ウイルス学キャンプ実行委員会

共催：日本ウイルス学会、JSPS 研究拠点形成事業 Core-to-Core Program

「ウイルスの二面性の理解・活用のための国際研究拠点形成」

日時： 2026年6月1日(月) 12:40 ～ 6月2日(火) 12:00まで(予定)

場所： ニューウェルシティ湯河原

静岡県熱海市泉 107 TEL：0465-63-3721

<http://www.welcity-yugawara.co.jp/>

湯河原駅(JR 東海道本線)下車、バス(奥湯河原行・不動滝行 約10分)

対象： 主に若手研究者(大学院生、学部生、ポスドク、教職員/常勤研究者など)。  
非ウイルス学会員の参加も歓迎。研究を真剣に行っている・行いたい方。

定員： 計50名(先着順で、定員になり次第締切らせていただきます)

費用(予定)： 参加費 3,000円 + 宿泊費 10,000円

### はじめに：「ウイルス学キャンプ」とは？

「ウイルス学キャンプ」は日本ウイルス学会 若手研究者育成プログラムの一環として2004年から始まった一泊二日の研究会で、古くより多くの芸術・思索が生み出された湯河原町で開催しています。全国の大学・研究機関等に所属する大学院生・学部生・ポスドク・若手教職員に、招待演者と世話人を加え、例年50人程度で開催しています。世話人も居ますが、一般参加者の方々には基本にご自身がこの会に積極的に参加いただくスタイルです。ご自身の研究を口頭あるいはポスター発表、聴衆からのフィードバックを得るだけでなく、他の発表にも遠慮なく議論いただく機会となっていますし、今後求める企画・発案ももちろん welcome です。

大きな学会では発表だけで終わってしまい、いまひとつ深い話をするきっかけがないと感じている方、研究室外の人たちや先生から本音の意見やアドバイスが欲しい方、同じ境遇の知り合いを求めている方、ほかにもコロナ禍での外出の億劫さから一歩踏み出したい方、コミュニケーション不足を感じている方など、そんなみなさんの要求に応える会です。今後のご自身に重要な出会いとなるかもしれません。時間の制約をできるだけ払い、参加して良かったと思って帰っていただければ幸いです。

若手のための会ですが、若手に特に定義があるわけではありません。日本ウイルス学会員限定の会でもありません。ご興味あるみなさま方の、ご参加をお待ちしています。



ウイルス学キャンプ in 湯河原  
若手研究者のウイルス集会 (Since 2004)



## おおまかなプログラム：

### < 6月1日(月) >

\*招待講演1 ～ 新進気鋭の研究者から最新の研究のお話 ～

1. 演題：「ウイルスを見つけたその先に待ち受けるもの」  
北海道大学 人獣共通感染症国際共同研究所  
危機分析・対応部門 准教授 松野 啓太 先生

マダニは病原ウイルスを媒介するだけでなく、未知のウイルスの宝庫である。マダニ中のウイルスには未発見の病原ウイルスも含まれており、新興ウイルス感染症の原因となっている。私たちのチームは、マダニの保有するブニヤウイルスに着目して研究を続けている。その中で、北海道で新興ダニ媒介性ウイルス感染症を発見し、その病原体となるウイルスを同定する機会を得た。ウイルス発見こそ次世代シーケンサーの力を借りたが、その後の研究では、古典ウイルス学そのものの教科書通りの研究を地道に実施している。本講演では、ウイルスを見つけた後に続く苦難の道のりを追体験してもらいたいと思う。

\*口頭発表（発表時間は15分程度） ～ 希望者から数名選出させていただきます ～

\*ポスター発表 ～ 口頭発表以外の一般参加者は基本的に全員ポスター発表をお願いします。発表データがない方は現在進行中/今後の計画などでも ～

\*夕食、お風呂

\*班別討論（ポスターないと）

### < 6月2日(火) >

\*招待講演2 ～ 新進気鋭の研究者から最新の研究のお話 ～

2. 演題：「陸上植物の抗ウイルス集団抵抗性」  
東北大学大学院 農学研究科 植物病理学分野 教授 宮下 脩平 先生

陸上植物は獲得免疫をもたない代わりに R 遺伝子 (*Resistance gene*) と総称される数十～数百コピーの遺伝子群をもち、その各々が異なる病原体由来タンパク質を認識するレセプターをコードする。病原体認識より誘導される「過敏感反応」はプログラム細胞死による感染域の局部壊死を伴い、この細胞死が植物個体内での病原体感染拡大を防ぐとされることが多かった。しかし演者らはキュウリモザイクウイルスを用いた実験と数理モデリングにより、細胞死は個体レベルの抵抗性ではなく、陸上植物特有の集団レベル抵抗性機構に寄与している可能性を明らかにした。数理モデリングの利用により生存戦略の比較や異なるスケールの現象の統合的議論が可能になることを、参加者の皆様と共有したい。

\*テクニカルセミナー ～ 役立てよう、こんな技術を使いたい！ ～

3. 演題：「ライブセルイメージングで紐解くウイルスの宿主細胞侵入機構」  
北海道大学 医学研究院 細胞生理学教室 准教授 藤岡 容一郎 先生

本セミナーでは、インフルエンザウイルス、SARS-CoV-2、HBV等を対象に、ウイルスの宿主細胞侵入機構とそれに伴う細胞応答の可視化技術について、ミクロからマクロレベルまで概説する。例えば、ウイルス粒子の細胞膜上の挙動やエンドサイトーシス後の細胞内移行を、全反射顕微鏡や超解像顕微鏡で解析した例を紹介する。また、ウイルス粒子の可視化手法や、FRET バイオセンサーを用いたシグナル伝達およびイオンダイナミクスの定量についても取り上げる。さらに、広視野イメージングによる細胞集団レベルでの応答解析から、カルシウム波伝播による感染促進機構について議論する。これらの実例を通じて、目的に応じたイメージング手法の適切な選択と使い分けの重要性を示す。

\*いまだから聞けるウイルス学講座 ～ 華々しい研究の場面から舞台裏まで ～

4. 演題：「ウイルスは生きているのか？—腸管ウイルス培養の謎から迫る—」  
学校法人北里研究所 北里大学大村智記念研究所 特任教授 片山 和彦 先生

ノロウイルス (NoV) やサポウイルス (SaV) などの腸管感染性ウイルスは、ヒト体内では爆発的に増殖し感染を拡大するが、in vitro での効率的な増殖培養が困難であった。わずか約 7.5 kb の RNA と少数のタンパク質からなる存在が、どのようにして宿主細胞を認識して細胞内に侵入し、自己のゲノムにコードされたタンパク質を合成してゲノムを複製し、子孫ウイルスを産生し続けるのか。この再現困難な増殖現象を手がかりに、本講演では「ウイルスは生き物なのか、それとも物なのか」という根源的な問いに立ち返り、最新の培養系の研究を通じて、ウイルスと宿主の相互作用の本質、さらには生命の定義そのものについて考察してみたい。

## 【参加申込方法】

以下の登録フォームにご記入し送信ください。



[第20回ウイルス学キャンプ in 湯河原 申し込みフォーム – フォームに記入する](#)

ご質問、お問合せは下記までご連絡下さい。

【宛先】

e-mail: [virology-camp\\*nih.go.jp](mailto:virology-camp*nih.go.jp) (\*を@に変更して送信ください)

ウイルス学キャンプ in 湯河原 事務局

渡士 幸一 (国立健康危機管理研究機構 国立感染症研究所 治療薬開発研究部)

【締切】 2026年5月1日 (金)

みなさまの多くのご参加をお待ちしています。

ウイルス学キャンプ世話人一同

(松野 啓太、小林 進太郎、川口 敦史、モイ メンリン、佐藤 佳、一戸 猛志、立川(川名) 愛、  
鈴木 忠樹、岡本 徹、岩谷 靖雅、野田 岳志、有井 潤、渡士 幸一)